

第1回中国語海外短期語学研修実施報告

—参加学生が書いたアンケートとレポートを中心に—

永井智香子

キーワード：中国語海外短期語学研修

1. はじめに

平成18年度より、留学生センターと大学教育機能開発センター、そして留学生課が合同で行う、初習外国語（中国語、韓国語、フランス語）、既習外国語（英語）を全学教育外国語科目として学んでいる学生を対象とした海外短期語学研修が順次、実施されることになった。平成18年9月2日から9月23日まで、先陣を切って中国語の短期語学留学が実施された。

長崎大学において初習外国語は2年間（4 Semester）週90分1コマ、計4単位（一部の学科では2単位）学ばなければならない必修科目である。中国語の短期語学研修の対象は原則として2年生とした。つまり、すでに中国語の単位を3単位取得した学生が最後の4単位目を2年生の夏の語学研修で取得しようというプログラムである。行き先は長崎大学の協定校、北京教育學院の国際交流センターで、費用は渡航費、学費、宿舍費、見学費、食費等すべて含めて約14万円であった。

留学生センターとしてこのようなプログラムの実施にかかわるのは初めてで、準備段階より試行錯誤の連続であった。当初、1学年約1000名の学生が初習外国語として履修している中国語であるから、参加学生を集めるのは難しくないと考えられていた。しかし、実際には思うように参加希望者が集まらず、途方に暮れたこともあった。それでもなんとか8名の参加者が決定し、実施にこぎつけた¹⁾。

参加者は8名（経済学部6名、工学部2名）と少なかったが、結果的には海外短期語学研修に参加したことにより、全員が中国語力を飛躍的に伸ばしただけでなく、現地の中国人や他の国から来ている留学生との交流を楽しんだり、また、北京のさまざまな場所に足を運んだりすることを通じて充実した異文化体験を行うことができた。全員、帰国後1単位を取得することがで

きた。参加者8名は初習外国語として必要な単位を全て取得し、大学での必修科目としての中国語の勉強を終えたが、平成18年10月から留学生センターを使って開かれた中国語専任教員によるボランティア中国語クラスに全員参加し、週に1回、中国語の勉強を続けた。その結果、8名のうち3名が中国語検定4級を受けたが、全員が合格した。さらに、平成19年春にはそのうちの1名が中国語検定3級に合格した。

参加学生8名に出発前、そして短期語学研修終了後にアンケートを実施した。さらに、帰国後、語学研修についてのレポートの提出も義務付けた。本稿は語学研修参加者へのアンケートと帰国後提出されたレポートの結果を中心に、筆者が引率して気付いたことを加えて、実施報告としてまとめたものである。

2. 出発前のアンケートから

出発前に3回参加者全員が集まる機会を持った。そのときに参加の動機とプログラムへ期待していることを問う記述式のアンケートを行った。A4サイズの用紙1枚に二つの質問を書くよう指示した簡単なものであった。まず、以下に二つの質問別に学生たちが書いたことを簡単に表にまとめてみた。

2-1 参加の動機について

純粋に中国語が好きだから
自分が知っている中国語で相手にものを伝えたい
将来外国と関わる仕事をしたいから
自ら行動したいと思っていたところ、ちょうど中国語研修があったから
日本以外の国の言語、文化を学びたいから
日本の隣国である中国のことを知りたいと思ったから
もともと夏は台湾に語学研修で行こうと思っていたところ、大学から行けると知り、値段も安かったので決めた
夏に外国に行きたいと思っていたて、どうせ行くならただの旅行じゃないものに参加したいと思っていたところ、中国語研修プログラムは比較的安く興味をひかれた

1年生の夏休みは何もせずにただ無駄に過ごしてしまった。今年こそもっと有意義な夏休みにしようと思い、参加を決めた
中国人留学生と話をしているうちに一度中国に行ってみたいと思うようになった
普段の生活の中では外国へ行く機会はなく、しかも学生として留学できるチャンスなので参加しようと思った
中国語Ⅳの単位がもらえるのもいい
中国語の勉強だけでなく、観光など、文化に触れる機会があるというところに魅力を感じた
値段も格安だし、いい経験になると思った

以上が動機であるが、意外だったのはこの留学プログラムの特徴とも言えることの一つが単位が取得できるということであるにもかかわらず、そのことに触れていたのは1名だけだったことである。全体的にみて、中国語が勉強したいということに参加の動機として全面的に押し出しているというより、むしろ、外国に行ってみたい、外国の文化に触れてみたいなどと、異文化体験を試してみたいというようなことを書いているものが多いようである。その他、いい経験がしたい、値段が比較的安いなどという動機もみられる。

2-2 プログラムに期待すること

文化や現在の中国の状況、日常的な中国の習慣など中国のことをより多く知ることができること（3名）
多くの中国人と接して、自分が中国語学習に対してもっと意欲的に学習するようになること
普段生活するにあたって知っておくべき言葉など日常的な中国語を学ぶこと
万里の長城等、中国の代表的文化地に行きたい
中国の文化などについて直接体験したい
ただ行って、単位をとってそれで終わりという結果にだけはならないようにしたい

プログラム修了後も中国語の勉強をしたい
文化交流
中国の学生との交流(2名) (特に日本のことをどう思っているのか知りたい)
中国語の上達 (3名)
土日は遠出したい
自分の飛躍的な成長

ほとんどのものがプログラムに期待するものとして中国語の上達をあげている。“単位をとるだけでそれで終わりにはしたくない”“修了後も勉強を続けたい”などの言葉からも中国語上達への高い意欲がうかがえる。また、中国の有名なところを訪問したり、さまざまな文化的な体験をすることを期待しているということがうかがえる。“自分の成長”という言葉も目にとまる。

3. 北京教育学院が準備した語学留学プログラムについて

具体的な語学プログラムを紹介する前に学生の住環境について簡単に紹介したい。北京教育学院国際交流センターは近くに大きいバスターミナルがあるという交通の便のいいところに位置する。教室、留学生寮、食堂、体育館などが一つの敷地内にある。長崎大学の学生も2人一部屋で留学生寮に住んだ。留学生寮にはタイ、ロシア、韓国、アメリカなどからの留学生が滞在していた。

平成18年3月に北京教育学院を訪問したときに長崎大学留学生センターと北京教育学院国際交流センター間で相互に合議書进行かわし、プログラムの事前打ち合わせを行った。その際、教科書は『汉语会话301句』（北京语言大学出版社）で、午前中は中国語のクラスで、午後は文化のクラスがあること、そして、週末に万里の長城に行くなど、プログラムについて説明があった。

より詳しいプログラムがわかったのは北京に到着してからであった。以下の表がそのプログラムである（最初、予定されていなかったが実施されたものも書き加えた。変更されたものは変更後のものを書いた。訪問したい場所と午後の文化のクラスについてはいくつかある文化のクラスや場所から7月に学生に話し合っ選んでもらい、その結果を北京に事前に報告していた）。

	午 前		午 後 14:00 ~ 15:30
	9:30-11:15	11:30-12:15	
9月3日(日)	北京動物園訪問		両替、開講式、歓迎食事会
4日(月)	発音復習と日常会話		実践活動(情報収集)
5日(火)	テキスト14課		13:15 音楽会
6日(水)	テキスト15課		17:00 餃子作り
7日(木)	テキスト16課		
8日(金)	実践活動の準備		道聞きと買い物の実践 19:00 ~ 京劇鑑賞
9日(土)	北海公園、天安門、王府井訪問		
10日(日)			
11日(月)	テキスト17課		カンフークラス
12日(火)	テキスト19課		切り紙クラス
13日(水)	テキスト20課		雍和宮訪問、音楽会、買物
14日(木)	テキスト21課		太極拳クラス
15日(金)	8:00 ~ 万里の長城訪問		
16日(土)	14:00 ~ 茶館訪問		
17日(日)	実践活動(午前中は準備、午後は中国一般家庭訪問)		
18日(月)	テキスト22課		カンフークラス
19日(火)	テキスト24課		切り紙クラス 19:00 中国人学生と交流
20日(水)	テキスト25課		
21日(木)	筆記試験と面接試験		太極拳
22日(金)	10:00 式		12:00 閉講食事会

プログラムを見るとわかるが、1日何も予定がなかったのは9月10日のみである。

筆者は前半の引率をした。引率中はできる限り授業の見学をし、学生たちと行動を共にするようにした。中国語は二人の教師が交代で教えたが、単語レベルで英語を使うことがあったが、使われていた言語は中国語のみであった。最初、学生たちは中国語で中国語を教えるクラスにとまどっていたが、すぐに慣れたようである。1週間もすると大学側からの情報伝達は学生らに直接中国語でなされるようになっていた。また、簡単な日常会話ができるようになっていた。とにかく、その上達振りには目を見張るものがあった。

また、中国人学生との交流も加えると計4回の実践活動があった。これはその名のとおり教室を出て、実際に中国人と話すことによって与えられたタスクをこなす活動であった。初日から実践活動があり、学生らには①郵便局に行って日本までの手紙にはいくらの切手が必要か②美容院に行ってカットはいくらか聞く③バス停に行って王府井に行くにはどのバスに乗ったらよいか聞くという三つのタスクが出された。もちろん、事前に準備のクラスがあり、終わったあとの復習クラスもあった。実践活動は夕方5時ごろまで続いた。「最初からきびしいですね」と中国語の教師にきくと「最初にこれをする、緊張感と中国語を話すことに対する恐怖がなくなる」というような答えがかえってきた。はたして、その教師の言うとおりであった。学生らはその後、実践活動を楽しみ、確実に中国語の力をつけていった。

受け入れ大学側にとっては長崎大学からの参加が8名というのは少なく、好ましいことではなかったが、結果的には人数が少なく、小回りのきくプログラムとなった。13日の音楽会や買い物のプログラムはあとから加えられたものである。人数が少ないので、教師の車に分乗したり、公共の乗り物を利用したり、簡単に動くことができた。また、8人と少人数なので、一つのグループとしてまとまるのに時間がかからなかった。

学生たちは互いに切磋琢磨しあい、よく勉強した。自由時間にはバスケットボールや卓球を楽しんでいたものも多かったが、夜には全員、与えられた自習室で遅くまで競うように勉強を続けていた。

以下に帰国後実施したアンケートの結果を報告したい。

4. 帰国後実施した語学研修についてのアンケートの結果

アンケートは参加学生が帰国したころ届くよう8名全員に郵送した。アンケートは大きくわけて6つの部分に分けられる。その6つとは①中国語の授業について②文化のクラスについて③見学、旅行、体験などについて④食事について⑤宿舎について⑥北京教育学院受け入れ態勢全般についての6つである。

評価は5段階評価とした。つまり、3はまあまあ、5がもっともよいプラス評価、1が最も悪いマイナス評価という具合であった。さらに、それぞれにコメントを書く欄をもうけた。以下に①から⑥まで順番に結果を報告したい。

4-1 アンケートの結果

①中国語の授業について

項 目	1 (マイナス評価)、3 普通、5 (プラス評価) までの評価別の人数とコメント				
	1	2	3	4	5
1. レベルについて	0人	0人	1人	3人	4人
2. 先生の教え方について	0人	0人	0人	1人	7人
3. 進捗について	0人	0人	0人	3人	5人
4. 初日の情報収集の実践活動	0人	0人	0人	2人	6人
5. 買い物の実践活動 (値切る)	0人	0人	1人	2人	5人
6. 一般家庭訪問の実践活動	0人	0人	2人	3人	3人

②文化のクラスについて

項 目	1 (マイナス評価)、3 普通、5 (プラス評価) までの評価別の人数とコメント				
	1	2	3	4	5
1. カンフークラス	1人	1人	2人	2人	2人
2. 太極拳クラス	1人	1人	1人	3人	2人
3. 切り紙クラス	2人	1人	2人	1人	2人

③見学、旅行、体験などについて

項 目	1 (マイナス評価)、3 普通、5 (プラス評価) までの評価別の人数とコメント				
	1	2	3	4	5
1. 9月4日の音楽会	1人	2人	2人	1人	1人
2. 餃子作り	0人	1人	2人	1人	4人
3. 京劇鑑賞	0人	1人	0人	2人	5人
4. 北海公園、天安門、王府井	0人	0人	0人	1人	7人
5. 雍和宮、西単、音楽会	0人	0人	1人	3人	4人
6. 万里の長城	0人	0人	0人	0人	8人
7. 茶館 (茶と舞台)	0人	0人	0人	3人	5人
8. 中国人の学生との交流	0人	0人	0人	0人	8人

④食事について

項 目	1 (マイナス評価)、3 普通、5 (プラス評価) までの評価別の人数とコメント				
	1	2	3	4	5
食事について	0人	0人	0人	3人	5人

⑤宿舎について

項 目	1 (マイナス評価)、3 普通、5 (プラス評価) までの評価別の人数とコメント				
	1	2	3	4	5
宿舎について	0人	0人	0人	2人	6人

⑥北京教育学院受け入れ態勢全般について

項 目	1 (マイナス評価)、3 普通、5 (プラス評価) までの評価別の人数とコメント				
	1	2	3	4	5
北京教育学院の受け入れ態勢全般について	0人	0人	0人	0人	8人

4-2 アンケートの結果からわかること

中国語の授業、見学、旅行、体験、宿舎、食事、これらはどれも高い評価であることが、アンケートの結果からわかる。

特に目をひくのが、アンケートの最後の項目⑥番の受け入れ態勢全般について問う質問にたいして全員が最高のプラス評価をしていることである。「北京教育学院はすばらしかった。言うことなし」「文句のつけようがない」「すごく良かった。物事を頼むとすぐに手配してくれたりだとか、先生たち自らが、観光に連れていってくださり、よかった。卒業のときも、これほどしてくれるのかと驚くほどであった」「最初不安だったが、とても歓迎的で接しやすかった。先生方も体調の面まで心配してくれて中国に来たというよりも実家に帰って来たような気持ちだった」「また行きたいです。パンフレットとかあったらほしいです」というようなコメントが書かれていた。これらのコメントは参加者8名がいかに満足していたかということを示している。

文化のクラスで一部低い評価が見られる。コメントには「途中からどっちがカンフーでどっちが太極拳かわからなくなった(3名)」「…自由時間を増やして街に出かけたり、言語実践をしたほうがよい」「切り紙は想像していたものと違った(3名)」などと書かれていた。このことから、内容がだぶっていたり、想像していたものと違っていたりしたことが低い評価の原因であることがわかる。また、「自由時間をもっと増やしてほしい」というコメントが書かれているが、このことは帰国後の学生との雑談の中で多くのものがそのことに触れていた。特に後半は中国語の力も上がり、自分たちだけで動けるようになってきたので、午後は自由に出掛けたかったというわけである。

5. レポートに書かれていたこと

前述のように短期語学研修実施後、アンケートのほかにレポートの提出も義務付けた。8名中4名しか提出しなかったが、そこにはアンケートからは見えてこない興味深いことも書かれていた。

まず、中国語に関してであるが、最初は全然聞いたり話したりすることができなかったが、実践活動を織り交ぜたプログラムにより、授業で習ったことをすぐに使ってみる機会が与えられ、自分の中国語力の上達を実感できたこと、さらには中国語がコミュニケーションツールであることを実感できた喜びなどについて全員が触れていた。また、小人数であったことがよかった、あるいはそのことに関連している記述もいくつか見られた。たとえば、以下のような記述があった。

- ・ 8人という人数がよかったと思います。25人も集まっていたら收拾がつかなかったと思います。
- ・ 8人みんながそれぞれ伸びようと努力していたことが本当に目に見えて、お互い競争しあって伸びていこうとしていたので、私にとってすごくいい環境でした。
- ・ 私は受身な人間ですが、こんなに刺激があったのは、小さい集団のなかにおいて、自分に降り注がれたものがより濃くて、より多かったからです。

北京教育学院の受け入れ態勢については次のような記述があった。読むとアンケートの結果で全員が受け入れ態勢について最高の評価をしたその理由がよくわかる。

- ・ 先生方は皆親切で私たちの勉強や、中国での生活のために一生懸命になってくれて、とてもうれしかったです。卒業式のときのセンター長の「ここはあなたたちの第二の家だからいつでも帰ってきなさい」という言葉にはとても感動しました。たった3週間しか滞在していなかった私たち8人を家族のように扱ってくれる北京教育学院に来られて本当によかったと思っています。
- ・ …どの場所にいても、先生方がその場所について説明をしてくださって、中国の歴史を知ることができました。あちらの先生方の対応はよく、いつでも私たちのことを気遣ってくださって、こちら側も言いたいことを素直に言

うことができました。

中国語を学ぶことを通じて国際交流のすばらしさや異文化を実感できたことについて触れていたものもいた。たとえば、以下のような記述があった。

・中国に着いたばかりの頃は全くといっていいほど中国語を話すことができませんでした。ですから、最初のころは自分から学院の人々に話しかけようとも思わなかったし、授業もただ単位を取るためにがんばろうと思っていました。それほど、当初に自分には国際交流に対する情熱がなかったのです。私が中国語を本気で習得したいと思ったきっかけは、たまたま同じ大学に留学していたタイの学生と知り合ったことでした。最初は自己紹介程度しかできませんでしたでしたが、少しずついろいろなことについても中国語で話せるようになっていき、だんだん中国語で会話することが楽しくなっていったのです。その頃から私はもっとそのタイの学生と仲良くなるために、必死になって中国語を勉強しました。授業もより集中して受けるようになったし、日常生活の中でも分からないことがあったら、すぐに辞書で調べる習慣を身につけました。その結果帰国するころには、ある程度の日常会話をスムーズに使いこなせるようになりました。

・…接するのが中国人だけでなく、世界各国から来ている学生もいて、彼らとの交流もでき、お互いが異文化にも係わらず話していて面白かったし、やっぱり国が違っても同じ人間なんだ、自分はとても小さい世界にいたんだということを実感できた。

さらに、参加したことによって自分が変わったというような記述もいくつか見られた。たとえば、次のようなものである。

・…留学をすれば、価値観やものの見方が変わるということです。私はこの留学で人間的に成長できたと実感しています。それはやはり、中国で3週間生活することにより、色々な面で自信が身についたからだと思います。

・私にとってこの3週間はきっと私の人生のターニングポイントになるでしょう。今ここで学んだこと、体験したこと、感じたこと、この全てを心に刻ん

でこれからの中国語の勉強や生活そして将来につなげていきたいと考えています。

6. おわりに

以上、アンケートとレポートの内容を中心に中国語短期語学研修についてみてきた。参加した8名全員にとって、人生のひとつの節目ともなる貴重な体験となったことがわかる。

学生たちの中には帰国後すぐに留学生課に留学相談に行ったものもいた、また、留学生センターで開講されている留学生と日本人学生の合同クラスに参加したものもいた。より長期の留学を決めた者もいる。

わずか3週間ではあるが、留学により学生は成長し、変わるということを目の当たりにすることができた。

注

- 1) 中国語の短期語学研修の準備段階から実施、実施後については『留学交流』「長崎大学における大学間交流の新しい取り組み」(Vol. 18 No. 12 December 2006 ぎょうせい) に詳しい。